

## 醒めた心酔、自然と愛への

### フレデリック・ゴダード・タッカーマンの詩

森 田 孟

フレデリック・ゴダード・タッカーマン (Frederick Goddard Tuckerman, 1821-73) は、十九世紀のアメリカはニューヨークランドの生んだ孤高の詩人として知られている。いや、殆ど全く知られていない。優れた研究者、批評家の幾人かに高く評価され、絶讃すらされ、奨揚され、その全貌が公刊されてから久しい(今年で丁度四〇〇年)にも拘らず。思い余って、といつのも烏滸がましいが些かならず義憤に駆られて、などと言えば尚更滑稽かも知れないが、筆者は先般、次の拙稿「希望回復への道程 フレデリック・ゴダード・タッカーマンの世界」(筑波大学文芸・言語学系紀要『文藝言語研究・文藝篇』第四三号、一三四ページ、二〇〇三年三月刊)で、彼及びその業績を巡っての歴史・事情の詳細共々、彼のソネット形式の全

作品一一一篇とそれらの終章とも目される長詩「コオリギ」"The Cricket"の本邦初の全訳を詳注付きで提示して、タッカーマンの世界に改めて光を当てようと試みた。

本稿はそれに続いて、この詩人が生前に公表した詩作品のうち九篇を、本邦初訳(の筈)によって紹介するものである。依拠する定本は今回もモマライ編の『全詩集』

N. Scott Momaday, ed. The Complete Poems of Frederick Goddard Tuckerman, New York: Oxford University Press, 1965. で、以下の九篇の作品の終末にその収録ページを(CP. 76-79)の如く表示しておく。

\*

イワナンシ (岩梨) Mayflowers

そこは矮性の松が 朽ち葉で赤く  
岩々を染め土を染め

骨ばかりとなったマツカサを染め  
足どりが鈍る所、

根や砕けた石を攀じ登ってゆくのみだから。

葉叢を抜ける風のそよぎが喘ぐ時には

川のざわめきかと耳は欺かれ

落ち着かぬ心が悲しみに沈むのも

沸き立つ音の調べのせい。

そこはおよそ変化の起きない所

大潮のこの上なく輝かしい最高時にも、

それで 夏 の子供らをその贈物と疎遠にする、

低地と高地と岩だらけの地帯が

花々でどつと溢れ返る時には。

そこは、 衰退 と凍った いのち 生命 が 共に

荒涼たる眼差しで迎いを

四月のとある気ままな空模様の日に眺め回している所、

そこに私は 隠れた 春 を見出した。

まだその 月 が 入り組んだ草地や窪地で

榛の木の小枝に葉を張り渡す前のこと、

川の浅瀬に花を咲かせて

灰色の柳の細枝を垂らす前のこと、

牧場まきばの空き地を黄金に染める

黄花キバナククリンザクラ九輪くりんざくら桜を彼女の指が揺り動かす前のこと、

血根草ちまきの銀色の帽子が

彼女が跳ね回った所で明滅する前だった、

断崖の上で陰鬱な岩鼻が

垂れ下った雪に隠れ、

木の葉の中を私の足は滑って

転んだ 彼女の足が初めて触れて立った所に。

枯れ落ちた松葉の下で

黴の生えた沃土から白く突き出て

垣間みえたのは バラ色の小花の一連り、

バラ色の小花が瑞々しく冷たげだった、

吹き払われもせず 風の動きの中で

こつこつとした枝の揺れる影の傍らに  
蕾が屈んでいた、意外にも星々となつて

その暗がりに横たわっていた。

熱心に、だが余り気乗りせず

昼間の光が照らしていた時のように

私はそのしがみついている香りのよい房の中から  
垂れ下っている茎を素早く取り去った、

するとその光は 混ざり合つた房の固まりの中に

意味なき音を立てる湿つて腐つたものの中に

沈んでいった 夏の終りの溜め息をつき

穏やかな日々の匂いを放った。

それで新たに活気づき、空想に慰められて

その影の中を私は通り過ぎていった、

生命が鼓動し 燃え上るように思われた、

私の最愛のものたちが放つ息の中で。

松の木々に別れを告げて

墓の周りに弔問客が近づくように  
歩みを進めていると 松の枝々の上に

西の方かたがちが光る洞穴から

日の光が谷間にさつと差して

即座の輝きで充たした

その窪地一帯を、小川の川床から  
雪に縁取られた暗い端々まで、

すると芳香と輝きに誘われて

あの蕾と私の周りに 赤い畝模様の葉と

星まがいの房の囲りに 呼び寄せられて

途惑つた蜜蜂が突進してきた。

というわけで 村が見えてくるまで

私は空気かきよの耀いの中で歓迎されたが

そこに着くと 張り出し玄関と蔓の絡まる窓から

更に一層相応しい出迎えが輝き出た。

乙女子らしい頭、頭が 半ば見え隠れ閃めきながら

覗き出た 木の葉も佯しい田舎家から、

とみる間に小さな子供たちが 踊りながら両手を

打ち鳴らして口々に叫んだのだった イワナシだ!と。

私は既に知っていた あの埋れた花飾りが

美しく瑞々しくバラ色で冷たげだったと

だから全てその生命には 前触れがあったのだ、

木々は日陰で隆起しつねり広がり

牧場はクローヴァー<sup>(4)</sup>で溢れ、丘の背には

シダの中をルピナス<sup>(5)</sup>が群れて

砂岩の岩棚にはアメリカシヤクナゲが

夕映え雲のように盛り上っていた。

だが その我が儘な心は、未練がましく

四月のその日一日中彷徨<sup>さまよ</sup>つて

永遠に萎れた牧草地のそばを

消え失せた径をとぼとぼ辿ってゆきそうだ

松の木々の朽ちた棘の中に 低く

閃き輝くあの光が見つかり、

この松あの松を吹く北風の 尚も

迸りやまぬ悔やみの声が聞こえてくるまで。

(CP. 76-79)

1. cowslip (= Primula veris), 牛の放牧地によく見られる。花言葉は「物思い」(pensiveness)なのでこの作品には相応しい植物でもある。

2. bloodroot (= sanguinaria), ケシ科サンギナリア属の多年草。

3. mayflower: ツツジ科イワナシ属の低木。タッカーマンが生育し居住したマサチューセッツ州の州花。

4. lupine, ウチワマメとも。マメ科ルピナス(ウチワマメ)属の植物の総称。花言葉「貪欲」(voraciousness)。

5. laurel, ツツジ科。月桂樹に似た葉を持つ。

\* 一八五〇年一月九日号の Little's Living Age 誌に初出の作品で、タッカーマンの初めて公表された詩である。作中の「彼女」とは、三年前に結婚し、琴瑟相和した最愛の妻ハンナを指すだろう。

自然 への深い愛と共感が、自然に対する微細な具体性に富む観察と描写によって形象化されており、この詩人の特質を遺憾無く示す作品である。小川と谷を包む山野を散索しながら村落に出た「私」を、一軒の田舎家から「イワナシだ！」と口口に叫びながら飛び出してきた子供たち、紛れもなく「イワナシ」の精なのであり、イワナシが擬人化されていると見てよいだろう。この作者は七年後には妻のハンナと死別することになるのだが、その悲運・悲痛をこの作品の最後は、早くも予言しているような趣きさえある。

\*

### ある共同墓地に捧げる讃歌

Hymn Written for the Dedication of a Cemetery

川の暗い緑の流れの傍ら、

ここ、松の木々が枝を垂らしている処には、  
赤く染つた秋風が冷たく吹くことだろう  
彼らの夢なき眠りの上を、

彼らの眠り、そのために祈りを籠めた息遣いと共に  
我々が今日取つておいた

この場所は、死が影を伴つて歩くためのもの  
且つ 衰退の庭々。

この、秋を戴いた崩れゆく盛り土、

この、嘆き悲しむ森林の道という道は  
今はもはや共有地とは思われず

各々が今度は 伝えているのだ

悲嘆に沈んだ何か更に多くの意味を。

瀕死の年だとも？

それとも幽かな影なのか、以前に送り込まれた、  
次にここへ集まつてくる人々の。

彼、沈黙する 全能者 が

今やその場所を引き受けて

午前の光を、自然の恩寵の

生命を 呑みこんでしまったのか。

そうではない この場所は美しく、

神聖なのはその地面だ、

要は我々が弱く、我らの眼が曇っているのであり

その他は全て 神にあっては公正なのだ。

だから彼らは横たえ、その墓は飾り立てておこう、

遺骨はこれらの影に包み覆わせて 悲しみ故に

拒んだり、恐れを以て疑ったりはさせずにおこう

彼らの安息のめでたさには。 (CP. 79-80)

\* 死に、死者に、思いを凝らすことは、生命への洞

察を深めてゆくことだ。前作「イフナシ」の自然との一体

感が髣髴とさせたのはウィリアム・カレン・ブライアント

(William Cullen Bryant, 1794-1878) の名作『死観』Thana-

topsis (1817) であるが、あの作品にも墓地の死者たちへの

讃歌が顫動していた。

## 靈感 Inspiration

\*

気にもとめず、だが行き止りにはなるまいと思って

私たちが曲がりながら歩いてゆくありふれた小径は

茨や葎に縁取られながら続いてゆく

ミルトンが身に帯びたり シェイクスピアが勝ち得たよう

な木の葉を残して。

それでも 詩人のようにはつきり信じて眺められれば

これほど不毛でない日に小径を行くなら

何しろ探求ずみの径なので、曲がってゆくのほんやり辿

るにしろ

尚、栄光の門が燃えている所には到れるかも知れない、

いやむしろ、光輝く十二時間のうちのおそらく一時間は

それでも最も奥深い視野には、バルブ弁が開くのかも知れ

ない

あの隠れた庭々に、そこは往時、偉人たちが

世間から歩み出て来て 病める心を慰められた処、

崩れることなき四阿に 尽きることなき井戸に 囲まれて

花々を摘み集めた処、その果実を私たちは味わうのだ、

とかくするうち、その日を悼む静かな時の流れのうちにも  
詩人の冠を持ち去らない時とてなく

時は関わりもしなければ意識もしないのだ どのようし

て彼が

夜の炎から 意味を集めるのかには、

その炎は 手が静止し頭がびつたり安定している時には

不滅の死者たちの頭上高く 星のように震えることだろう、

それで彼らが、涙を誘う栄光と共に

その時影なす闇の中で

静かに照らし出すのだ 人々の記憶する

その眠れる人の物語を。

そしてそれこそが私の物語だ、私にはこういう光景は次第

に退いてゆく、

私には、オレンジがかった色合いのうちに、いつも生れる

のだ

空しく過ぎた一日の褪せた深紅色が、

朝の金色にして紫の雄々しさが、

春の生命が、夏が取り戻す力が、

悲しくも九月が色付けする枯れゆく木々の葉が。

晩秋になって平地にはら撒かれ

風に一塊りに集められ、腐敗を招く雨に混ぜ合わされて。

遂に崖から崖へと帯なす雪が現われて

逝つた年と新生の年とを白く結ぶ。

これらの全てが、深遠な音楽に合わせて、私にははつきり

浮かび出るが

やはりぼんやりと消えてゆく。その意味を攫めないまま

私は深々と身震いし、暗く陰鬱に沈んだ眼を

いつまでも上げているうちに年月が過ぎ去ってゆく。

さもなければ、このような有様からがっくりしたまま

私は 明白な実例が煌き出る所に 光を探し求めにゆく、

尤も名のある人々が 頭上に光輝を散りばめて

通行を促し、滞る歩みを導いてはくれるもの

私はのろのろぶらつき、もっと暖かい輝きを探して見つめ

続ける、

相変わらず魂を震わせながら 私は

曙光が見えるまで 独り

強いられて彷徨う人のようだ、

満天星空の冬の夜の

どうしようもない壮麗さの下を。 (CP. 80 82)

1. ミルトン、シェイクスピア各々の作中に言及箇所がありそうだが、目下のところ適切な該当部が見当らない。一八五一年の夏、タッカーマンは好きな英国詩人たち所縁の地を訪う旅に出て、例えば前者の学んだケンブリッジのクライスト学寮では「ミルトンの桑の木」の小枝を記念に折り取り、後者の生地ストラットフォード・アポン・エイヴオンの教会境内ではアオイを採集している。

2. *gates of glory*、バイブルやバニヤンの『天路歷程』あたりに典拠がありそうな句だが、前者にはこのままの形では見当らない。後者は未調査。

\*この作品は、次作の「心酔」(Infatuation) 共々、一八五二年五月二日号の *Littell's Living Age* 誌に掲載された。

## 心酔 Infatuation

それが彼の一つの望みなのだ、自分の生活圈をまずまずし  
かるべく

巡っている他のものは何であれ全て 今は殆ど数え挙げな  
いこと。

名前の誇り、豊かに恵まれた土地、  
決然たる友人たち、自分に与えられた天賦の才も

一人の婦人の微笑みに逢って縮んで無に帰してしまつた。  
助言、叱責、嘆願、全ては失われてしまひ

それらの力を使い尽くす 風に波立つた水面みなものように  
何の痕跡も残らない、それで世間の口が悪しざまに言う

嘲りながら 棘すように愚弄しながら、だが何もせず、  
感じられぬ 聞かれもしないまま せつかちな矢が飛来す  
る、

それでも意に介さず 彼は諂いの列に連なる、

彼女の手管に捕らわれる気取り屋、愚か者、追従者たちの  
列に、

そして彼女のものかも知れない卑しいものは一切度外視す  
る。

\*



愛情に、あるいはそうだと自ら思つものに浸つて  
彼は当座の急場を凌ぐとして

それ以上は求めずに 唯 驚攫みしようとだけする、  
心を駆り立てられはしても決して安らぎは与えられないも  
のを。

あたかも印度洋で難破してずぶ濡れになつた水夫が  
どろどろした海藻と漂流物と大洋の滓に囲まれた  
幾らか下方の触れば傷つけられる珊瑚礁にしがみつくと  
う。

それでも彼はこういつた仲間付き合ひは気にもとめず  
震える両手を握り締めて力強く揺るので、  
持ち上つてくるうねりも 突進してくる波も物ともせず。

(CP. 82)

\*この作中の「一人の婦人」も、詩人の妻ハンナを指すもの  
だろう。「一人の婦人」に心酔すること、それが「彼」  
の一つの望みだと明言する。見事な覚悟といふべきだ。  
"Infatuation"とは「惑溺」であり、「のぼせ上ること」で  
あり、「夢中」になることだ。価値あるものへの到達、価  
値の発見・産出は、まず何にしる「心酔」から始まるだろ

う。但し夢中になりつばなしでは目が眩んで盲目になる。  
醒めた心酔、冷静・冷厳なる溺れ込みでなければなるまい。  
タッカーマンはそれが出来た人である。天文学徒であり、  
動植物など生物学にも造詣の深い科学精神の所有者であつ  
た。こういう詩を書くことで自己省察を実践し続けたので  
あり、「心酔」を 醒めた ものにしようとしたのである。

### ピコメガン<sup>(1)</sup> Picomegan

\*

金の星々 腐蝕の進む緑の地面  
クレマンティス<sup>(2)</sup> 網なす繁み

銀に輝く苔 巻毛を垂らして

果敢な乙女のように、

オモダカ<sup>(3)</sup> ずぶ濡れの暗い旗は  
汝の更に暗い波の中。

川の途切れた境界のそばを  
シダを掻き分け 水を涉つてゆくと  
更に暗い深みが一層広くなって

その入り組んだ草原を充たして曲がってゆく、  
曲がりくねる尾根をずっと上り

急に落ち込んだ下り坂を下り、  
葎が縁取る溜め池をぐるりと回り

静まり返った洞穴を囲い込むのは榛の木々、  
川に生えるガマとスゲの中を

夢見心地で私は進んでいった。

夢見心地といったのも すっかり夏になって

谷間は靄こもる熱で鎮まり返っているからで  
森の中では物憂いドラマ奏者の

キツツキが幽かに打ち鳴らしていた。

歌という歌は静かだった、声といえば唯

山の声 洪水の声、

人里離れた土地でしか知られない

声々の叡智は別にして。

だが 孤独に生きる私に

日が昏れてゆくあの午後の間中

侵蝕してゆく川から訪れたのは

整った調べの重荷であり

耳に聞き覚えのある調子だった、

そこで私は言ったものだ、「如何なる悲嘆が汝を悲しま

せるのか、

汝の葉陰の部屋部屋を通り抜けながら

更に汝の声から安らぎを奪い去るのか。

嘆き悲しみ吹き荒れる変化の風また風が

陽の差さぬ朝な朝な、震え戦く夕べ夕べに

汝のものなる喜びを運んでくる、

光の全てを汝の縁は受け入れる、

覆い群生する河川植物は

水流の導くままに従ってゆく、

紫シオンの群がり、

ハツカと血を滴らすツリフネソウは

淡緑色の葉の間に

ぶら下っている紅玉髓カーネリアンズのようだ、

そのうちそこへ、幸いを約束し この上なく

喜びを昂めながら陽光が差してくると

汝の流れは鼓動しはじめ

血の脈打ちと調和をみせる、

辺りを覆う汝の淡緑色の陰の中で

心を抱き締められて眠っている時

汝は悲しみ 物想いに耽るのか」と。

更に広く、もっと激しく、岬を回って

黒々と 川 はたゆたい流れていった、

村はずれを 突き出た森林地帯を

ますます深い静寂が圧しかかった、

もう一度私は立っていた 夢を見ながら

荒涼たる雑草の間に、

疑いと、苦痛と、極度の悲嘆は

減ってゆくように思われた、

だが幽かななまめかしい悲しみが

襲ってきて 私は空想をありつたけぞくぞくと駆り立てら

れ

湾曲した入江を凝視<sup>みつ</sup>めながら

言っていた、「おお悲し気に 川 よ 汝は

昔と同じように曲がりくねり消耗しながら

いつでも砂礁<sup>さく</sup>を乗り越え

急ぎの音をさらさら立てて

縁の乾いた牧場<sup>まきば</sup>の裾を流れてゆくね、

でも私の諸手は汝の川床の傍らで

もう集めたりはしないよ 秋の寶石を

あるいは夏の放つ珍珠を。

囁れ声で水の流れる端の辺りには

黄色いギシギシ<sup>8</sup>とアメリカヤマゴボウ<sup>9</sup>が生え、

泥染みの付いた難破船の漂流物が

川の寄せ波に雨の残滓にと混じり合う。

それでも侘しく纏められ、

纏められ組み合わさって 汝ら水という水は

歓喜の叫びを挙げて注ぐのだ

岸辺岸辺に阻止されないで、

唸りを上げる深い振動を立てて。

その風の中で私の頬は湿りを帯びる、

だが悲嘆にも警告にも注意を払わず

汝はその不毛な時間の間ずっと

夏を歌ってやまないようだ。

汝はあらゆる悲しみを蔑む声を挙げながら

囁き続けるのだ、木々の葉のこと花々のことを、

ぐつたりしながらもその間 私は嘆き続ける、

崩れた堤を四阿を、

ささやかな恩寵を讃える生命を、

目的を失い 力を落としながら、

残骸を投げつけられて 波に切り裂かれた水際のように

裂け目を抉られて まるで冬の驟雨に逢ったよう。

だが私はもしかすると 汝の音楽が教えてくれる信仰を

よじ登っていつて知るに到れるかも知れない、

それでも 憧れ求める心は懇願するのだ

真理をこそと、丁度夏の時期に

この小さな谷々を漠然と彼女を求め歩いた時みたいに

夢見心地の夏の時間に」。

というわけで 辺鄙な小径と開けた土地を

もう一度彷徨<sup>さまよ</sup>わんものと出かけて来たのだ、

唸りを上げる水、渦の結び目、

泡の塊を 後にして。

だがやはり、私は今度も途惑うばかりだった、

理性では夢は生れないので、

川の尽きた跡から

何も実っていない野原を曲がりくねって来たものの

私には何ら手に入らなかった

意味あるものは 信じられるものは、

川が告げる勝利の声のうちにも

それが悲しむ叡智のうちにも。

(CP. 83-86)

1. タッカーマンの居住した町グリーンフィールドを流れる「グリーン川」(Green River)を指す先住民の呼称。この詩で「汝」と呼びかけられている川。

2. *clemanitis*. 如何なる植物か未詳。

3. *arrowhead*. 矢じり形の葉をした水生「湿地」植物

の総称

4. *river-flags*.

5. *sedges*. カヤツリ草科スゲ属の植物。

6. *aster*. キク科アスター属の草の総称。

7. *jewelweed*. ツリフネソウ属の数種。

8. *dock*. タデ科キシギシ属の植物の総称。スイバ、ダイオウ等。花言葉「忍耐」(*patience*)。

9. *garget*. =*pokeweed*, *scobe*. ヤマニボウ属の多年草。高く伸び、紫色の液果をつける。根は薬用、若枝は食用になる。

\* 一八五四年七月号の Putnam's Monthly Magazine 誌に初

出の作品 本稿に訳載の作品は全て、タッカーマンが一八六〇年に私家版として出版した『詩集』*Poems* に収録されたが、これを贈られたナサニエル・ホーソン（一八五〇年に『緋文字』を公刊）は、大変感銘を受けたとして他の数篇と共にこの作品の標題を挙げた懇切な礼状を返した（コンコードから一八六一年四月一四日付）

## 至高のもの *The Superlative*

\*

何たる不可思議 逆説が人生とは、

平安な時でも不可思議だが 不穏な際は更に不可思議

歩きながらの夢、はたまた激しく不毛な骨折り、

可動する据え付け装置、その永続しながらの変化

唆して挫折させ、期待させて失敗させる、

蓄積した総体にあつて不可思議、個々の事実において不可

思議。

不可思議だ 生き埋めにされた 巨人族グイガンの獻獻のよう

に

守護靈ゼニウス の引き起す地震の振動によって ひとつたび

魂を静寂と日光の中へと持ち上げられた人間が

むさ苦しい霧と 足場の辺りで鳴り響く

地上の騒音との間にあつて天国を凝視みつめ

星へ星へと突き進んでゆかずには再び零落することになると

は。

不可思議だ 婦人 が優雅な愛の高潔さを

まとい、自らの衣服を黄金帯のように

護る慎しさを備えていながら

その衣装を引き裂いて 恥さらしにも

衆目に身を晒して物議を醸し、女性であることを放棄し

て

それは踏みにじられた土地では異形なものだとすると。

しかし尚、不可思議の最たるものは これらの中で、あ

るいは

人間の犯罪や思考と並ぶ如何なるものの中でも、

天国から我々に届くこの上なく洗練された贈物から生れ

る誇りだ。

天国ではこういつた心同志は その辛辣さに刺されて  
互いに離れ合い、許されようと切望しながらも  
確固たる惨めさを育成することに 誇りを抱くのだ。

(CP. 87)

\* 誇り高く廉潔に生きた詩人が、不可思議なこの世の至高  
のものとして 誇り Pride を高言する。四連とも各連は  
A A B C B C、の脚韻構成で六行目はいずれも「アレクサ  
ンダー格詩行」という整然たる形式の詩である。

\*

### 問い掛け The Question

我が愛しい人をどうしようか。

我が恋しい人をどうすればよかったのか。

豊かな髪もそのままに 彼女を

無垢なまま言葉なきまま立たせておくのか。

立ち居静かに 美しさも露なまま

髪つややかに輝くままに。

それとも優雅な掛け布の部屋のために

土地を荒廃させ、海を掠奪するのが。

あるいは 白い帯が高々と疾駆しながら

東方の高台のうねりの上の

真珠の畝かと紛う余白を切り開く時

露めく薄暗がりの時刻に

真黒々の夏空から

一幅の青地を剥ぎ取るか。

たそがれ時のバラ色の縞から離れて

各々がきらきら光る星の房と共に

黄金の煌きを振り出し

彼女をそつと寒さから連れ戻そうか。

彼女を捕えて雲にまで持ち上げようか、

ここでは彼女を讃えるには 誇り高く通り過ぎ

六月のきらきら輝く森を滑ってゆき

月から雨の輪に届けというのか。

あるいは彼女をもつと暖かく包むために

死を免かれぬこの地球から掻き集めた

衣服で我が身の上辺を飾らせてもらおう。

ペルシャハシドイ<sup>(1)</sup>染色の、

紫色の、金銀線細工で艶のない、  
飾り模様をつく前のインディア<sup>(2)</sup>の葉より

稀な赤色にぐるつと囲まれた  
衣装に彼女の美しさをくるもう、

彼女の頭には王冠をのせよう。

そうすれば彼女を高く冷たい所へ導くことになり  
そこでは銀の踏み台から転がってきた

深紅色が床の上を流れている、

真珠と貴重な明るい大理石を

残して迸る川のように、

縞瑪璃<sup>(3)</sup>、ミルラ樹脂、白鉄鉾<sup>(4)</sup>、

それに緑色の碧玉、いや これらだけではなく

名高い白雲母石<sup>(5)</sup>があり

玉座へと昇りつめてゆく。

支えに柱、屋根に蹴上げ<sup>(6)</sup>、

全ては水滴と染料液で震えており

それにダイヤモンドの貴重な眼が。

そして彼女は、まるで突然風に

顔や身体を襲われたかのよう、

ダイヤモンドは稀にみる雨滴のよう、

真珠は髪に降りかかった霰のよう。

灯火の明りの赤みがかつた流れの中を

宝石が宝石の上できらめく宝石と

交錯している、そこは宝石に取り巻かれているのだ、

彼女の剃き出しの手首足首の周りでは

装身具の宝石が煌きを放ち注目を浴びる、

古代宝石ヒヤシンス<sup>(3)</sup>、薔薇名、ベスブ石<sup>(4)</sup>が。

あるいは、彼女が忍び寄ってくる、優しい装いで

白衣のハイモン<sup>(5)</sup>の乙女のように

糸杉の陰の下を曲がりくねりながら

ビヤクシンの陰を、緑の小径を

白い張り出し玄関と柱の間を。

アマランサスの眼<sup>(7)</sup>が私の眼を凝視める、

髪は仄かな色のキンセンカのように、

夢見ているような彼女は 私にとっては

ヘーロー<sup>(8)</sup>ともヘロデイス<sup>(9)</sup>とも！

甘やかに横向きに動きながら

花々の中を彼女は足を曳いてゆく、

こちらへ今 細波がやってきて  
ギンバイカにミルラノキにゴムノキに  
水を注ぐ、ヘリーオクリユーセとアモママ共々。

ああ！そうではない、ニューイングランドの花よ、  
彼女の美しさは古い神話体系の

星々とは別でなければならぬ、  
巫女とかクリューソフオーリとは。

妖精の衣装も 王族の持参金も  
燦然たる時期の彼女には相応しくない、

自由に大胆に彼女の歩みは流れなくてはならず、  
あらゆる人々が彼女の往き来を眺める。

彼女の足元にその惑星は横たわり、  
昼と夜とは彼女の眼の中に宿り

彼女の上に星の旗はばらまかれる。  
見たまえ！彼女はそこに一人で立っている、

誇りが、彼女の暗い視線の裡に、王が  
愛が、彼女の頬はバラ色に染まっている、

すっかり自分のものである庭に  
何と！彼女は立っている、稀なる薔薇を

冠にして、辺りに漂う彼女の張りつめた

本質は 薔薇の花壇にたゆたっている

味爽の蜘蛛の巣のようなので

私は彼女に心を寄せる、

心と庭は すっかり彼女の所有物

実際はそのようなものを気にする者があるうか、

唯、私の腕は彼女の周りに神々の煌きを

投げかけたなり、数々の王冠を授けることが出来たが。

あるいは、昔からの神々が神に相応しい贈物の全てと

恩寵を 彼女に与えることが出来たと言うべきか。

若いメドワーサの神聖な房髪が、

ペロプスの骨の硬化した肩が、

イスメーネの蜜蜂を惹きつけた唇が、

ヘリアデスの涙が、

海が引き込まれる辺りに屯する

きらきら輝く貝の間に 落下した。

この惑星の川の豊富さが、

暗い海底が抱えるあらゆるものが、

広い地球の緑の凸面部が、

尽きることなき青い空が、



保持する貴重品も、それ程誇り高く高価ではないので、彼女を優雅に飾れたのだ。華やかに堂々と庭の微風と薔薇の息吹きを吹きつけて、

あるいは、今宵のように、私は彼女が美しく立っているのを見たのだ。牧場の土にクローヴァーを手にして。

(CP. 89 92)

1. Persian Blach. アジア産、花は深紅紫色。モクセイ科ハシドイ属。

2. India. 1)の植物未詳。

3. hyacinth. 紫水晶かサファイアと考えられている。

4. Idocrase. = vesuvianite. 主としてカルシウム、アルミニウムから成る加水ケイ酸塩鉱物で、褐色か緑色。

5. Haemon. キリシヤ神話。テーへの王クレオンの息子で、許婚のアンティゴネの墓で自殺した。

6. cedar = juniper. ヒノキ科ヒヤクシン属の常緑球果植物の総称。シンに香りをつけ、利尿剤にも用いられる。

7. amaranth. 伝説上の不死の花、不凋花。

8. Hero. キリシヤ神話。古代ギリシヤの美と愛の女神アフロディテに仕えた女神官で、溺死した恋人レアンドロ

スを追って投身自殺した。この恋人は愛するヘーローに会うために夜ごとヘレスポントス海峡を泳ぎ渡ったが嵐の夜に溺れ死んだのだった。

9. Herodice. 1)のギリシヤ神話の女性、未詳。

10. myrtle. 銀梅花。フトモモ科ギンバイカ属の常緑低木。芳香のある白花をつける。ヴィーナスの神木とされ、愛の象徴として結婚式の花輪に使用される。

11. myrrh. カンラン科ミルラノキ属の植物の総称。これから浸出する芳香性樹脂が、没薬。

12. Heliochryse. ヘロス(沼地、牧草地、牧場)とクリューソス(黄金の)から成る合成名詞。ギリシヤ語のヘレイオクリューソス、あるいはヘリクリューソスからの借用語。gold-flower. 戸部順一教授の御教示に依る。Cote-d'az. 属の剛毛葉の一年生薬草で単生もしくは散房花序の小舌状オレンジ色放射頭上花をつける。

13. amomum. シユクシヤ(縮砂)。シヨウガ科シユクシヤ属。葉は直立する地下茎につき、シヨウガに似た長楕円状披針形、卵形の穂状花序を頂生し、芳香のある大きな純白色の花をつける多年草。

14. Crysothoreae. 未詳。

15. Medusa. ギリシヤ神話。三人姉妹怪物のゴルゴンの一人。ペルセウスに殺され、その首はゼウスとアテナの盾に取り付けられた。

16. Pelops. ギリシヤ神話。タンタロスとティオネの子。父に殺され、オリンポスの神々の食事として捧げられたが、ヘルメスによつて復活させられた。

17. Ixione. ギリシヤ神話。オイディプスとイオカステとの娘。小文字で始まる語だと中南米産ヒガンバナ科ヒメノカリス属の觀賞用植物の総称。= Peruvian daffodil.

18. Heliodus. ギリシヤ神話。古代ギリシヤの太陽神ヘリオスとクリメネーの娘たち。フェアトンの姉妹で彼が死んだ時その死を嘆いてポプラの木になったという。

\* 問い掛けを連発する形で、花々や宝石類で飾り立て、ギリシヤ神話の数々の物語の断片を下敷に使いながら華麗に形象化してゆく、「我が愛しい人」「我が恋しい人」である。「彼女」も、作者の妻ハンナであらう。

彼女は黒髪の慎しやかな美人で、タッカーマンとの間に二男二女を儲けたが（そのうち最初の二卵性双生児の長女は生後間もなく死去）、次男（四人目）出産五日後に産後

の併発性で急逝した（一八五七年五月一二日）。十年間の結婚生活であり、タッカーマン、時に三十六歳であったこの突然の悲劇が彼に及ぼした衝撃は測り知れぬものがあり、もともと、ボストンの商人として成功した父親の十分な遺産のお陰で、天文学、植物の研究と詩作に専念して隠遁気味だった彼の生活は、以後、度を越して孤独なものとなった。

先刻も触れた彼の私家版『詩集』（一八六〇）は、妻の没後に出版されており、その収録作品には、妻の生前に製作が判明しているものも含めて、何らかの姿で、彼女が深く反映しているのが窺えるのである。

\*

たそがれ時 Twilight

静かに暗くなってゆくうちに

丘の頂が薄暗くなり 消えてゆく  
夕べの紫色の靄も今は

もはや谷間を縁取ることもない、

幽かな肌色の雲が 分れては

西へ向かつて一ひら一ひら

きらきら輝く静寂のうちに離れてゆく時

私は独りでそつと歩きたくなる

川のそばを 猷道すゐのみちのわきを、

灰色のハコヤナギの木立を抜けて

止んで久しい音楽の

声々を求めて 耳を澄ますのだ。

曲がりくねってゆく水の辺り

葦の尖つた葉の間に

虚しい秋風のように訪れてくる、

彼らの悲しみが 私の耳に。

沼から 仄暗い浅瀬から吹いてくる

空ろな秋の風のように

やってくるのだ あの声々の悲しみが。

そこで私は黄昏どきに

雑草の繁る水際を辿りながら

何となく想いめぐらす 何故あのような囁きが

これ程物悲し気に 過ぎ去りし日々  
の深みから息づいてくるのかと。

優しく涙を誘う調べを

こつそり盗み聞きしていると

分ってくるのだろうか あの四阿や家屋は

崩れて土くれに石になったのだ

彼らがかつて歌を歌っていた処なのにと。愛情溢るる唇に

静かな寂しい眠りが涙を伴って

居座つたのだと、心を籠めて想い起こせば

やはり彼らは深みから現われはするのだがと。

あの 良心 が思いを凝らすのか

「彼らの心が深々と波打つたのも 汝のためだったのだ」と。

そうなるのもこの私が あの善良の上ない心の

持ち主たちが信じたとおりの者ではないからなのか。

おお 注ぎゆく流れよ、おお 声々よ、

おお 悲嘆よ、おお 更け行く夜よ、  
汝らは心に慰めを与えてくれない、  
汝らは唯、再び結びついて

物思わせる陰鬱となり 風の咽び泣きとなる、  
そして冷たい悲しみが 死 のように  
川の縁から忍び寄ってきて

無益な夜風の  
氣力を挫く息吹きとなり

涙の力を借り  
現実とも思えぬ苦悶を伴って  
晩年の生命いのちに押し掛かるのだ。

川 に繋るガマト

苔色の榛の樹皮を見ていると  
幽かに遠く灯る村の明りが  
雨けぶる間に明滅し

柳はしだれて水に浸る、  
なのに何故、砂洲や岸から  
やってくるのか これまで慈しまれてきた人々の

声という声が苦情となって。  
彼らはおよそこういう影を知らなかった、  
それで溜息を洩らす川の流れが  
このくすんだ日々には彼らの耳を一撫でして  
彼らを慰めることをしなかったのだ 長らく。

船は沈んだり 打ち砕かれたが  
埋め隠す泡の間や

荒涼たる砂洲の上では ここかしこに姿がちらつく、  
大波が寄せ返す時には

壊れた大船の破片 断片が。

だからこの余り見慣れない流れに  
それを包む静かな森に どっと集ってくるのだ  
私と共に航海する気高い心が抱く

思想、追憶、疑惑に夢が、

ここに この砂漠となった地点に  
やってくるのだ 彼らの朧な亡霊が、ここでは実は  
彼らは知られも育まれもなかったのだ。

それこそその心であり、その心が記憶していて  
激しく情熱溢れる意志を

森に谷にと住まわせ 注ぐのだ

その意志の叫びを 流れに丘の周りにと。

私は その嘆き悲しむ朝に相応しく 丘陵を眺め回す、

するとそれは未だに家のことを囁き

一日が昏れてゆく時に

私にもっと彷徨えと駆り立てるのだ

無気味な取りとめのない欲望を抱かせて、

まるで乾燥した所を歩き回って尚も

探し求めながら安らぎを見い出せないでいる

邪悪な精霊の要求のようだ。

それでも静まり返ってゆくうちに

丘の頂は光が薄れて見えなくなつてゆき

たそがれ時の涙ぐましい色合いも今は

もはや谷間を縁取ることもない、

紅い色の褪せた雲が 分れては

西へ向かって一ひら一ひら

情熱溢れる静寂のうちに離れてゆく時

私は独りでそつと歩きたくなる

川のそばを 獣道のわきを

灰色のハコヤナギの木立を抜けて

止んで久しい音楽の

声々を求めて 耳を澄ますのだ。

(CP. 92 95)

1. aspen. ヤナギ科ハコヤナギ属の植物の総称。

\*この作品、一連十二行から成る八連詩で、第一連と最終  
第八連は、いずれも最後の五行が全く同じ反復行であり、  
この二連共、A B C B D E A F G H I H、の型の脚韻構成  
を持つ。そしてこの二連のEとFは、“one”と“alone”で  
視覚韻(eye rhyme)である。この二連に挟まれた第二  
第七連の六連はいずれも、A B C B D E F E G H I H、の  
型の脚韻構成を備えている。各連共五行目は十音節)と  
は十一音節)で行頭が突き出た詩の姿をしている。整然  
たる韻律で「黄昏時」が流麗に物憂く、「私」の散索しな  
がらの観察と共に浮上し形象化される。

不可思議な誇りを「至高のもの」と受け取る作者が、「靈感」を重じ、身近な自然の中に身を投じて自然の種々様々な相を自らの心と五感の全てで観察・感取しながら、「隠れた 春 を見い出」そう(「イワナシ」)、「意味あるもの」「信じられるもの」を得よう(「ピコメガン」)、「たそがれ時」の薄明の中に「光」を求めようとし続けた筈が、それが、本稿の諸作に窺えるタッカーマンの詩の世界、ということになるうか。最後にもう一篇、興味深い作品を取り上げておきたい。

「誰にも批評家」では、この詩人の真価は見抜けまい。こういふ作品によつて彼は、しかるべき人の批評家(Somebody's Critic)を後世に期待したのか。二十一世紀がその後世であつて欲しいものだ。

### 誰にも批評家 Anybody's Critic

\*

先鋭な、卓越した、浅薄な、と 場に叶う  
調法な文句を使い、彼には最も欠けている  
適用の巧みな呼吸を物にして

才気にも富み、幾つかの点で賢明で

例えば 選び出す箇処、飛ばす場所を心得ていて  
「靈感による合い言葉」を口の端に乗せて

彼は有利な立場を占めて今や尤もなことに  
彼を二十五年この方忘れている連中を驚かす、  
満足気な眼をした黝頭の少年だ。

見たまえ、今やこの 学者 を、学殖深い 判事 を！  
それでも自らの足で不安定な立場を感じ取つて  
彼は逃げ腰になつたり、冗談を借用して

余りにも真に迫られると質問をはぐらかすのだ  
賞賛しながら非難を、顔を顰めて友情を示して、  
こういふ彼を我々は見て来なかつただろわか 誇り高い精

神を

穩やかに貶したり、自らに光を当てたりする  
本とペンとの下手な信奉者を。

あらゆる点で彼より勝れている

強力な詩人も、おそらく一般庶民を前にしては  
恥じ入るだろわか、だが我らが批評家を見たまえ 彼の眼は  
全てを見透かすよつだし、鼻は乾いたスミレの匂いも  
嗅ぎつけそつだし、眉は世界を圧倒せんばかり。

彼の右の掌では 書かれた紙片がくるくる回される。

前には、ある光景が拡がり、そこに見えてくるだろう、空をぐるっと目で追えば、低い雑木が、高く抜きん出た樹木が。

彼の傍らには若者が目を凝らして

その言葉を待っている この 巨匠 が立ち上がるまで

顔を赤らめて、自信を示すというより怯えて、

おそらく手にしていたのだ 自作の詩を、

あるいは誰か思想の大物から届いたばかりの手紙を、

豪華な宝石のように、彼は半ばしびしび見せる、

それを若者なら誇らしく思っても誠に尤もだ、

全く真心が籠っていて甘美で、終りまで親し気で

決まり文句や滓ばかりの空疎な言葉は一語もないのだと。

「そう、そのとおり」と この 巨匠 は言う、「自筆だし！」

確かに褒められていい、そのようなものは 売れる し、

それに、君の詩としては、気が効いている」と。

それからその粗末なページを無雑作にめくりながら

全てを片目の半分で呑みこんでいるみたいに

彼は言った、「そういうものの値打ちは分らないものだ

もし 芸術 が我々に靈感を与えるなら 我々が歌っても

無駄だ、

もし単なる 自然 への愛なら それは十分ではないし

個人特有の主題には勝れたものは殆どないか有害だ、

何故ってこの騒がしい時代、批評家が群がり溢れていて

誰も非難を浴びずに ぶつぶつ泡立つ小川や

草深い丘陵の無駄話に耳を傾けてはいられないのだから、

ブルゲ口通りのハーメルンの笛吹き(じ)のように、

それでは鼠どもを駆け回らせることになろう」。それから

ある表情を、草から美を取り除き 青空を曇らせる

表情を見せて、彼はその話題をやり過こして

他の主題に移る、何かに、神のみぞ知るだが、視線を投げ

て、

農場、野営、公共広場、ピット(こ)にパーク(こ)にと、

そして打ちつけた、親し気な言い回しで

触れた、彼にはそのようなものは価値がないか

率直に言って欠けていると判っていたので、自らの生涯最

良の

作品について 気安く語った、卑下自慢で褒め讃えながら。

(CP. 134 35)

れ「る」騒がしい時代」なのだから。

1. ドイツ民間伝承の英雄・魔法使い。
2. 事実上の英国の首相として七年戦争「英国と同盟したプロイセンと、フランスとロシアの支援を受けたオーストリアの戦争。北米では英・仏の植民地争奪戦争が行われた(1756-63)」を指導した初代チャタム伯の大ピット(William Pitt, 1708-78)と、その子で英国の首相を二度務めた、アウステルリッツの戦いでナポレオンに敗れた小ピット(William Pitt, 1759-1806)がいる。ここではどちらを指すことも可能だろう。

3. アイルランド生まれの英国の政治家(ホイッグ党)雄弁家、著述家エドモンド・バーク(Edmund Burke, 1729-97) *Whig*。

\* 誰にも(Anybody's)とは、名もない、平凡な、という意で、批評家に対するタッカーマンの、ユーモア溢れる皮肉な作品である。タッカーマンの詩を読んでいるとすぐ気付くことだろうが、彼は終生、「ぶつぶつ泡立つ小川や／草深い丘陵の無駄話に耳を傾け」続けた詩人なのである。彼が幾度か浮上、ないしその兆しを見せながら今も沈み続けるのも宜なるかな。現代はますます「批評家が群がり溢